

第

42

回

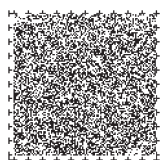
全国中学生

人権作文コンテスト

入賞作文集



- ・相手と自分、両者を守る
- ・大切な命
- ・「かわいそう」ではありません
- ・我が家の人権問題
- ・おんちゃんが教えてくれたこと
- ・こんな姿でまたの再会を
- ・夢への架け橋
- ・違いを認め合う心
- ・子供の人権を守るために
- ・私にも夢がある
- ・僕らは今を生きる



この冊子には、音声コード（Uni-Voice）が各ページ（奇数ページ左下、偶数ページ右下）に印刷されています。

Uni-Voiceアプリを使用して読み取ると、記録されている情報を音声で聞くことができます。



第42回全国中学生人権作文コンテスト中央大会

表彰式(令和6年2月16日(金))

内閣総理大臣賞を受賞された兵庫県の加西市立泉中学校3年の小篠誌織さん^{おざし おり}を法務省にお招きし、小泉法務大臣から、表彰状とトロフィーを贈呈しました。



小篠誌織さんと小泉法務大臣と人KENまもる君、人KENあゆみちゃん

表彰状伝達式(令和6年2月19日(月))

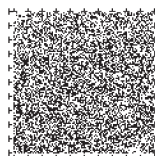
法務大臣賞を受賞された愛媛県の愛南町立御荘中学校3年の宮本 龍太さん^{みやもと りゅうだい}、文部科学大臣賞を受賞された神奈川県てらうち すいの藤沢市立湘南台中学校3年の寺内瑞偉さんを法務省にお招きし、鎌田法務省人権擁護局長から、表彰状とトロフィーを贈呈しました。



宮本龍太さん



寺内瑞偉さん

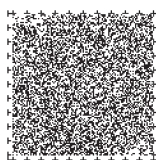


第四二回

全国中学生人権作文コンテスト

入賞作文集

法務省人権擁護局
全国人権擁護委員連合会



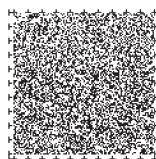
はしがき

法務省と全国人権擁護委員連合会は、お互いの人権を尊重し合うことの大切さを伝えるための人権啓発活動の一環として、昭和五十六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生が、人権問題についての作文を書くことにより、人権尊重の重要性及び必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けることなどを目的として実施しているもので、令和五年度で四二回目となりました。

令和五年度は、六、四九四校の中学校から七六万一、九四七編にも及ぶ多数の作品が寄せられました。応募いただいた皆様、ありがとうございました。

この作文コンテストへの応募作品は、いずれも身近にある様々な人権問題について、「誰かのこと」ではなく、自分のこととして真剣に考え抜いたことが、素直に、また、丁寧に表現されており、作品に表れた中学生の皆さんの豊かな感性や純粋な感覚は、読む人の心を動かすものばかり



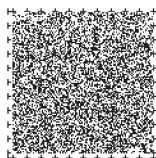
りです。

この作文集をより多くの方々に御覧いただき、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願ってやみません。

終わりに、この作文コンテストの実施に当たり、多大な御尽力をいただいた全国各地の教育委員会及び中学校等関係各方面の皆様方に対し、心から感謝を申し上げます。

令和六年三月

法務省 人権擁護局
全国人権擁護委員連合会



目次

【審査講評】

中央大会審査員長

落合 恵子
おちあい けいこ

6

【入賞作文】

内閣総理大臣賞

相手と自分、両者を守る

兵庫県 加西市立泉中学校三年

小篠 誌織
おぎさ しのり

10

法務大臣賞

大切な命

愛媛県 愛南町立御荘中学校三年

宮本 龍太
みやもと りゅうだい

14

文部科学大臣賞

「かわいそう」ではありません

神奈川県 藤沢市立湘南台中学校三年

寺内 瑞偉
てらうち すい

18

法務副大臣賞

我が家の人権問題

広島県 廿日市市立大野東中学校の生徒の作品

22

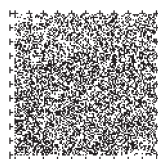
法務大臣政務官賞

おんちゃんが教えてくれたこと

埼玉県 草加市立草加中学校三年

齋田 凜奈
さいた りんな

26



5 第42回全国中学生人権作文コンテスト

審査講評

「へわたしVからはじまる」

中央大会審査員長

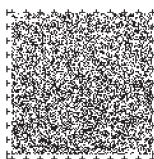
おちあい
落合 恵子
けいこ

2024年を迎えたその日。16時少し過ぎに、震度7の地震が能登半島を襲った。テレビの画面に釘付けになるわたしの脳裏に今まで体験した自然災害のさまざまな場面が交錯し、重なり合って押し寄せてきた。

2011年3月11日の東日本大震災。それより前の阪神淡路大震災、3・11以降の各地での大きな震災もまた。いつだって犠牲になるのは、高齢者や子どもたち、社会的に「声の小さい側」に置かれている人が少なくない。

この厳寒の下、能登の人々に、いまこの時点で必要なものは？ 共通して必要なものと、個々で違う必要なものがある。それらはどちらもかけがえない、その個人の暮らしの必需品であるはずだ。それらはいつ、どのようにして、必要とする人々、ひとりひとりの手に届くのだろうか。

京都大学の助教授藤原辰史さんが、わたしが発行人を務める育児雑誌『月刊クーヨン』に寄稿



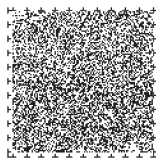
されたコラムの一部が頭に浮かぶ。いま、この国に必要なのは「防災」であり、「防衛」のためにお金を使うことではないだろう、という内容のエッセイだった。わたしもそう思う。

阪神淡路大震災で、わたしは米国の女性アクティビストから教えられた。「生理用品を集めて被災地に送りなさい」。一方、東日本大震災の時、わたしは阪神淡路大震災の被災者だったひとから教えられた。

「食料と言っても、アレルギーなどでみんなと同じものを食べられない子も大勢いる。そういう子のことを忘れないで」等々。ひとたび「平時」とは違う何かが起きたとき、社会は、そして多数派は「みんなと同じ」を軸にしてものを考えがちで、みんなと違うひとの「違い」から無意識であろうと目を逸らせがちだ。ひとはみな、それぞれがそれぞれの違いを生きているのだが。その違いから学ぶことがたくさんあるはずなのに。

*

第42回全国中学生人権作文コンテストでの入賞作品。ひとつひとつの力強く、かつセンシティブな作品について審査員があれこれ論評するよりも、伝えたいことはまず「読んでください」である。中学生だけではなく、人権というと、またかよ、とそっぽをむく大人は特に。法務副大臣賞を受賞された作品と法務省人権擁護局長賞を受賞された作品については、「ご本人等の希望により氏名等を非公表とする予定です」という



報告を主催者から受け取った。

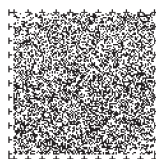
この時代、ちょっとした拡散で、誰かがスケープゴートにされる場面をわたしたちは体験してきた。今回の非公表の理由はわからないが、そのことも受け手であるわたしたちはしっかりと考えたい。

*

昨年度の講評の冒頭で、一冊の絵本を読んでいる、というようなことを書いた覚えがある。アフリカ系アメリカ人の、ジェイという名の男の子とその家族の日々を描いた絵本だ。アリシア・D・ウィリアムズさん文。ブリアナ・ムコデイリ・ウチエンドウさん絵。二人とも女性で、米国生まれのアフリカ系アメリカ人だ。

主人公のジェイもまた彼女たちと同じだ。子ども時代のある時まで、ジェイは近所の仲間たちとくたくたになるまで遊び回っていた。幸せな少年時代。祖父から同じ肌の色をしたスポーツ選手の手輝かしい功績についても聞いた。一人の成功が、次世代やそのまた次の世代をいかに励ましてきたかも。しかし、ジェイの明るく透明感に満ちた季節は、ある日を境に終わりを告げる。

その日、ジェイは家族のみんなに注意をうける。守らねばならないことについて。守らないとどんな目に遭うのかもまた。



★ポケットに手を入れない。(凶器がポケットにあると思われるから)

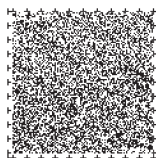
★フードをかぶらない。(顔を隠していると思われるから)

★友だちと道で騒がない。(喧嘩をしているように見えるから)

ほかにも、遅くまで出歩かない、たとえガムひとつでも買ったラシシートはとっておく(盗んだと疑われないように)等々。「自由の国」アメリカ合衆国がジェイたちにどんな差別をしてきたか。その差別がいまもつて終わつてはいないことを問いかけた絵本である。

23年12月。この絵本をわたしは主宰するクレヨンハウスという書店から翻訳刊行した。幸い、いろいろなメディアで紹介していただいているが、わたしたちの社会、わたしたちの地球には、まだまだ閉ざされた扉がある。

今回の応募作品の中にもその萌芽が見受けられるが、LGBTQの人々への差別。その他、こ
とあるごとに頭をもたげる、差別意識の根っこはまだ土の中にあつて、枯れてはいない。だから
こそ、あなたは、そしてわたしたちは学ぶ、歴史を、そして現在を、誰かの消されそうな声を。
絵本の裏表紙に、わたしは詩人石川逸子さんの詩から2行いただいて、紹介した。わたしたちは
遠くの出来事には「美しく怒る」という痛いフレーズだ。わたしたちは近くの出来事にも怒らな
くてはならない。そう、すべては、へわたしVからはじまるのだ。

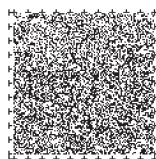


内閣総理大臣賞

相手と自分、両者を守る

兵庫県 加西市立泉中学校 三年

小篠 誌織
おざさ しおり



「じゃあ、本当のお母さんじゃないってことなの。」私が、私自身のことについて友達に伝えると、大抵、このような言葉が一番初めに返ってきます。その度に、私は体の熱が一気に冷めるような気持ちになります。

養子縁組という言葉は、多くの人が聞いたことがあると思います。養子縁組とは、血縁関係のない人の間に法的に親子関係を持つことです。婿養子などという言葉なら、聞いたことがあるはずです。私は、普通養子縁組ではなく「特別養子縁組」という制度で、産まれてすぐに今の両親に迎えられました。特別養子縁組は、産みの親との法的な親子関係を解消し、新しい両親と戸籍上、実の親子関係を結ぶことです。

私を産んでくれた母は体が弱く、シングルマザーでもあったようです。私を育てたくても、育

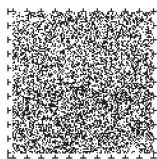
てられる状況ではありませんでした。私がまだ幼い頃、母からそのことを聞きました。当時の私はそれほど深く理解しておらず、「私にはお母さんが二人いるんだな」というような軽い解釈をしていました。

私が小学校三年生の頃でしょうか。私は友達に初めてそのことを伝えました。すると友達は、「じゃあ、今のお母さんは本当のお母さんじゃないの」と言うのです。私は頭の中が真っ白になり、上手く答えられなかったのを覚えています。また別の子には「産んでくれたお母さんに捨てられた」という言葉を受けました。そのとき、私はショックを受けました。今となつては、相手に悪気はなく、深く考えて言った言葉ではないことは分かりますが、当時は、「なんで養子に出されたんだろう。私はいらない子だったのかな」と深く悩み、悲しく苦しい気持ちでした。

それから何日か経ち、私は母に特別養子縁組について尋ねました。そこで初めて、私を養子に出したのは、産んでくれた母が、私にできる精一杯の愛だったと分かりました。幸せな環境で育つてほしいという、母の想いだったのです。それを知って、気持ちが増えるのと同時に、考えが大きく変わりました。

母と、産んでくれたもう一人の母。どちらも私にとっての「本当のお母さん」であり、私を想ってくれる大切な存在です。

今、私は小学校からずっと一緒にいる友達には、そのことを伝えています。全員が理解してくれていて、今では、共に遊び学べる仲間です。一方で、中学校になって新しくできた友達には、このことを言うことができていません。一度話をしかけ



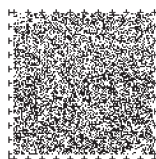
たとき、やはり、「本当のお母さんじゃないんだ」と言われ、その瞬間に上手く答えることができませんでした。

そんなとき、私を支えてくれた言葉が「無理に言わなくてもいい」というものでした。すべてを今言う必要はなく、自分が傷つかないよう心を守る手段として、「言わない選択」があるのです。自分自身に強制するのではなく、本当に伝えたい、と思ったタイミングで、上手く伝えられなくてもいいから、少しずつ理解してもらえるように努力していくのです。

私は、小さい頃からずっと、特別養子縁組というものが、どういふものなのか考えてきました。私には母が二人いる。母も、私を産んでくれた母も、本当のお母さんで、私を愛してくれています。特別養子縁組というものにとっても悩むこともありました。しかし、今では私にとっての誇りでもあるのです。私には、私を大切にしてくれる二人の母がいるのですから。

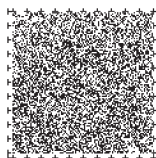
「人権を守る」これは、相手の人権を守ること。そして、自分自身の人権を守ることでもあるのではないだろうか。相手のことを知って、色々な方向から見ても、自分で考えて理解する。これが、相手の人権を守ることだと考えます。そして、自分自身について伝え、時には無理に言わずに、タイミングを計ったり、相手に少しでも自分について理解してもらえように自分なりに努める。これが、自分自身の人権を守ることです。

私は、相手と自分、両方を守る人間になりたいです。人は、平面的な存在ではありません。必ず立体であり、それが球体であるか、立方体であるか、角錐であるか、または円柱か八面体か、



人それぞれです。それらを人が勝手に決めつけたり、一方の面から平面的に捉えることが、相手を傷つけることにつながるのだと思います。だから、相手を守るには、様々な方向から見ても捉え、理解する必要があるのだと思います。また、自分自身の形を理解して、相手にも理解してもらえるように工夫することが、自分自身を守ることにつながるのではないのでしょうか。

相手と自分を守るために、私は一步を踏み出しました。私の一步が、誰かの一步につながることを信じています。



法務大臣賞

大切な命

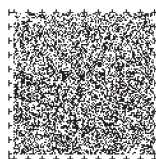
愛媛県 愛南町立御荘中学校 三年

宮本 龍太
みやもと りゅうだい

一人に一つ、平等に与えられた大切な命。そして、いつかは終わりを迎えるもの。だからこそ、そのかけがえのなさを感じるものである。

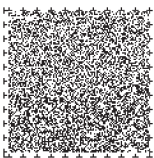
しかし、その命を粗末に扱う現実がある。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まってから五百日が過ぎる。両国の犠牲者は増える一方だ。テレビで家族や友人、大切な人を失い泣き崩れている場面を何度も見た。それを見るたびに僕の胸は苦しくなった。平和な日常が、死と隣り合わせの不安な日々に一変したのだ。そして、そのような毎日が今日まで続くとは予想しなかったと思う。

ある日、この戦争について家族で話題になった。「何で今さら戦争なんか。」「何か私たちにで



きることはないかな。」「早く戦争が終わらないかな。」様々なことを話した。しかし、本当の戦争の恐ろしさを知ることはできない。これらは戦争のない平和な世の中に生きる僕たちならではない意見だろう。僕は戦争に反対だ。なぜなら戦争は命を奪うからだ。失うものは多いが得るものはない。戦場に赴く兵士には、帰る場所があるし、大切な家族がいる。戦地で無事でいるかどうかを心配するだろう。そして、その死を悲しむ人がある。だから僕は早く戦争が終わってほしい。僕にも大切な家族がいる。しかし、病気はその大切な家族を奪っていった。僕が中学校一年生の冬のことだった。中学校への入学を楽しみにしていた小学校六年生の妹が突然熱を出したのだ。熱は一、二週間続いただろうか。原因が分からないまま過ぎていく時間は、僕たち家族にとって、とても長く感じられた。不安な時間が過ぎていった。レントゲンを撮ったことで病名が分かったが、病気と闘わなければならぬ厳しい現実がそこにはあった。心の整理のつかない僕は妹にどう声をかけたらいいかわからず、ただ「頑張れ。」としか言えなかった。

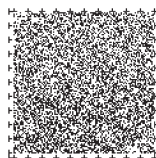
妹は松山の病院に入院することになった。始めの一、二か月を妹は一人で過ごした。病気への不安や一人で過ごすことの寂しさを見ると、僕には我慢できるだろうか。僕にはできないことを成し遂げる自慢の妹だ。その後、母は付き添いで妹のいる病院に泊まることを決めた。僕は妹と母がいない生活に違和感を覚え、寂しさが募った。しかし、辛いのは自分だけではないし、誰よりも辛いのは妹だと思い我慢をした。一ヶ月に数度、妹のお見舞いに行くのが楽しみだった。妹は僕を見て喜んでくれたが、家に帰れない寂しさや病気との闘いに疲れているのか、眠たそうであった。

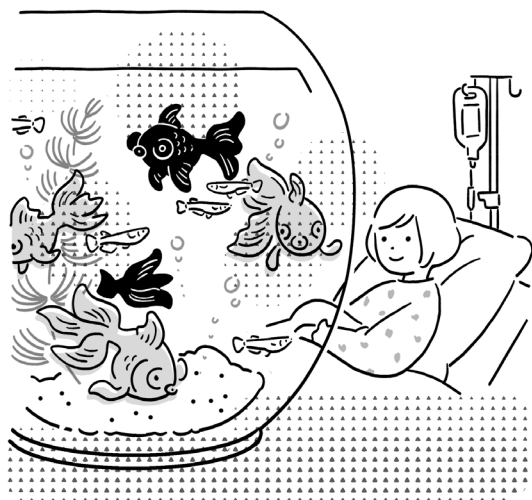


中学校二年になった僕は修学旅行をみんなと一緒に楽しんだ。修学旅行を終えたその夜中、祖母の携帯に一本の電話があった。「妹が亡くなった。」と。僕たちは急いで松山の病院に向かった。僕は悔しさと悲しさで胸が一杯になり、泣くことしかできなかった。妹は、中学校生活を送ることなく、亡くなったのだ。家族や友人など、大切な人の命が失われることの重大さと深い悲しみや、もう二度と会えないのだという喪失感を知った。

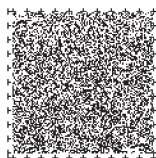
一人に一つ、与えられた命。決して軽いものではない。誰にも代わりのきかない、かけがえないものである。僕の命も、あなたの命も。そして、戦争で失われた数多くの人々の命。兵士だけではない。若者やお年寄り、小さな子どもたちにもその命は平等にあったのだ。そして、中学校でバスケットボール部に入ることを楽しみにしていた僕の妹にも。生きたくても生きられなかった命があることを知ってほしい。自ら命を絶とうとしている人に僕の思いが届いてほしい。昨年の自殺者は二万人を超え、その数の多さに驚くばかりだ。生きているだけで幸せだということを実を忘れさせるくらい、どんなに大きな悩みを抱えていても、与えられたたった一つの命を生きてほしい。あなたの周りを見回してほしい。あなたのことを大切に思っている人がいる。あなたを失ったら深い悲しみに沈む人が必ずいるのだから。

僕は今、一日、一日を誰よりも大切に生きようと思っている。人間だけではない。生き物の全てに大切な命がある。無邪気に殺してはいけない。五匹の金魚とたくさんのメダカを飼っているが、真剣に向き合って飼えば家族のように思えてくる。どんな命でも大切にすべきである。い





つかはなくなる命だけれど、どんな命とも「一緒に成長したい」という気持ちを持って接するようになっている。未来は誰にも分からない。いつ戦争や病気、交通事故などで失われるかもしれないのだ。だから一日、一日を大切にしたい。皆に平等にある命の重さを知ったからこそ、生きていることの幸せを感じる。僕は命と向き合う看護師の道を目指したいと思っている。



文部科学大臣賞

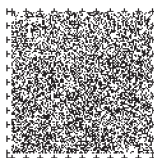
「かわいいそう」ではありません

神奈川県 藤沢市立湘南台中学校 三年

寺内^{てらうち} 瑞偉^{すい}

「お腹にいるときに病気が分からなかったの。分かっていたら産まなくても良かったのにね。かわいいそうに。」

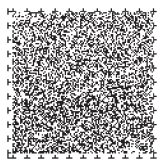
これは、まだ私が保育園児だったときに、近くを歩いていたおばあさんが突然発した言葉だ。最初、私は何が起ったのか分からず、声のする方を見上げた。すると、おばあさんは弟を抱っこしながら歩いている母に向かって話していることが分かった。弟は、先天性の心疾患がある。生まれたときから手術や入院を繰り返し、一歳過ぎまで、在宅酸素の機械を使用しなければならなかった。もちろん、外出するときには、大きい酸素ボンベを持たないと外出ができない。だから、母はリュックサックに酸素ボンベを入れて背負い、弟を前向き抱っこして園に迎えに来てい



た。弟は酸素ボンベとつないだ鼻カニュレにより酸素を吸入しているのが当たり前だった。のぞきこむように弟を見ているおばあさんに、母はそれとなく会釈し、私の手をひいて逃げるように家へ帰った。おばあさんが言っていた、「かわいそう」とは一体何をさしているのだろうかと思議に思ったこと、母と握っていた私の手には指の跡が赤く残っていて驚いたことを、私は今でも鮮明に覚えている。

言葉の意味を理解したのは、数年後だった。たまたま目にした『コウノドリ』というドラマの中で「出生前診断」というものがあることを学んだ。これは出生前に、胎児の染色体疾患などが分かるものだ。そのため、あらかじめ疾患を知り、出生後の治療に役立てることに、中絶という結果を招くということにもつながるのだそうだ。あの時のおばあさんの言葉が頭をよぎり、私は燃えるような怒りを感じた。大病と闘いながら生きていくくらいなら、産まないであげたほうが良かったのと言われていたのと同じだということに気がついたからだ。弟は、生きる価値がないのだろうか、「かわいそう」な存在なのだろうか。

私はそうは思わない。私には、もう一人弟がいるのだが、病気があってもなくても、どちらも変わらない大切な弟たちだ。毎日よく怒って泣いて笑って騒々しく過ごしている。決して「かわいそう」な存在ではない。だから、もし悪気なく発した言葉だったとしても、この世に生まれてきた命を、否定するような恐ろしい言葉だったということ、本人だけでなく家族全員を傷つける言葉だったということを知ってほしいと、心から強く思った。

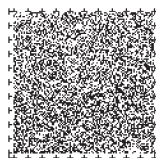


自分とは異なる面をもつ人のことを「かわいそう」に感じている人が、実は多くいるのではないかと、私は思う。例えば、私は左利きなのだが、「右利きに直さなくていいの。」と聞かれたことや「左利き是不便でしょ。」と言われたことが何回もあった。物心ついたときから左利きなので、不便に感じたことはなかった。しかし、右

利きが多数派で左利きは「かわいそう」というレッテルをはられているような言葉に、良い気持ちにはしなかった。利き手や病気は生まれながらにして自分の一部であるのだから、個性みたいなものだと、私は思う。個性は魅力でもある。みんなが同じでは、むしろ意味がないのではないだろうか。弟は、今でも感染に気をつける必要があるため、何かと制限があり窮屈さはある。しかし、できることを、精一杯楽しんでいるように見える。いつも笑っているから、自然と周りには人が集まり、私からしたらうらやましいくらいだ。弟は魅力のかたまりである。

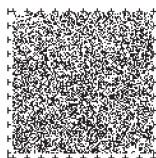
「多様性」について、小学校や中学校で学ぶ機会があった。多様性を受け入れて生きていくということは、自分と比べて、異なる面を持つ他者を「かわいそう」だと感じることはないし、みんなと同じでなければ不幸だということでもない。その視点にたつことこそが重要だと、私は考えるようになった。

つまり、多様性とは、一人ひとりの生き方を尊重していくことで、他者を上から見ることでも下から見ることでもなく、比較することでもない。有りのままを認めて、毎日を共に生きることだと思う。そもそも、苦手なことを克服するために費やす時間は人それぞれ違うはずだ。鉛筆をにぎる練習に、弟は何ヶ月間費やしたのか分からない。手術の繰り返しで指先に力が入らなくなっ



てしまったからだ。でも、弟は毎日練習して、今では鉛筆をにぎって文字を書けるようになった。それが全てであり、他者との比較は不要なのだ。

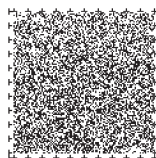
できなくて仕方ないとか、代わりにしてあげるといような考え方ではなく、挑戦していることをそつと見守り、できるようにになったことを素直に「すごいね」と、声をかけ合える社会になれば、みんなが笑顔になると思う。きつと「かわいそうに。」という言葉や考え方もなくなり、誰もが自分らしく自分のペースで胸をはって生きていけるはずだ。そんな社会を目指して、これからも私は弟と笑顔で生きていく。



法務副大臣賞

我が家の人権問題

広島県 廿日市市立大野東中学校の生徒の作品



「LGBTQ」先日の広島サミットではようやくこの議題が取り上げられ、世の中では理解が進みつつあるようだ。そんな中、私の家では妹がその当事者になり、そのことについて考える機会が増えた。

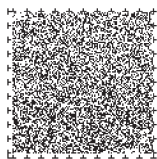
妹は、もともと可愛いものより格好いいものが好きだった。プリキュアよりも戦隊ヒーローが好きで、スカートよりズボンを好んではいた。私は単にそれだけの事だと思っていたが、思春期を迎えると妹が女性であることを異常に嫌がりはじめた。私はそれが理解できなかった。私もスカートやフリフリした可愛い服は嫌いだ、女性であることは嫌ではない。そのため体のサイズに合わないメンズの服を着ようとする妹の心がわからなかった。女物でも格好いい服はあるのに

なぜダメなのか、なぜ同じような柄の服なのにレディースと知っただけで嫌がるのか、また、それが原因で毎日母と言い争う姿に私はイライラした。反発がエスカレートしていくとさらに私は困惑し、ますます腹立たしく思った。

妹が長かった髪をばつさり切りベリーショートにした時、やっと彼女がLGBTQに当てはまると理解した。それまでの私は妹の性自認が男だと気付いていなかった。なぜなら私たち姉妹は趣味が同じで、よく少年マンガを読んだり一緒にゲームをしたりする似た者同士だと思っていたからだ。そのため、私が嫌ではないことがなぜ嫌なんだ、という思いや、私と話している時は昔と何も変わらないのに、という思いになった。一方で今までの妹の行動はそれが原因だったのか、とその時ようやく納得した。

しかし、私は妹の性自認について理解してもまだ違和感を感じていた。妹は急に男友達と遊ばなくなったり、一人称を「私」から「自分」にしたり、高い声を出さないようにしたり、次から次へと私達が驚く行動をした。今までの妹を知っているからこそそれらの行動にショックを受け、「元に戻ってほしい」と思ってしまうことがあった。

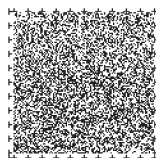
私は今まで、LGBTQに対する偏見はないと思っていた。しかし、いざ身内がそうになると否定的なことを言ったり、考えたりしてしまうことに気が付いた。例えばテレビに性的マイノリティの人が出ていても変だとは思わない。むしろ、そういった人を批判する人達を許せないとさえ思う。ただそれが身内だと、「きつと気の迷いだろう」「元々の妹に戻って」と思ってしまう。このようにして私も家族も妹を、知らず知らずの

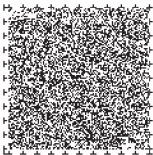


うちに傷付け、追いつめていたと思う。私は差別なんて有り得ないと思っていたのに、一番身近な家族にそんなことを思ってしまった。そしてそんな自分にとっても驚いた。そのままでもいいよと受け入れるべきなのに。性的少数者が生きづらい理由のひとつは、こうして家族などからも否定されることがあるからだと理解した。

私は妹の事で、LGBTQの問題を身近に感じる事ができた。おそらく世の中には、私のようにLGBTQのことを理解している『つもり』の人がたくさんいると思う。しかし、いざ自分の周りにそういった人が現れたら、否定的なことを言ったり、思ったりすると思う。それは仕方ないことかもしれない。ただ、それは私のようにその人を傷つけてしまうことになる。そんな理解した『つもり』をなくすために、まず自分自身や身近な人がそうだったら……と色々な想像をしてみてもいい。

世の中にはLGBTQに限らず、あらゆるマイノリティの人達が生きづらさを抱えて暮らしている。妹も家で、学校で一日中生きづらさを感じている。私は、SDGsでも謳われた『誰一人とり残さない』世の中になることを願い、自分自身そういった人達に起こる問題を理解し、私の正しいと思う行動をしていきたいと思う。そして皆が同じような気持ちで、少しずつでも世の中が変わって家が、学校が、会社が生きづらさを抱えた人にとって、優しい場所になってほしいと思う。



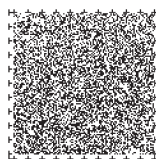


法務大臣政務官賞

おんちゃんが教えてくれたこと

埼玉県 草加市立草加中学校 三年

さいた
齋田
りん
凜奈



私には、障害者の叔父がいます。私が小学六年生の時まで、一緒に住んでいました。私の母の兄なので、「おんちゃん」と呼ばれています。おんちゃんは、生まれつき言葉が話せない障害を持っています。手話ができる訳では無く、普段は彼の独自のジェスチャーを使って自分の気持ちを伝えています。

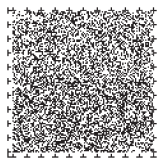
私は小学校三年生の時から、祖父母の家でおんちゃんと一緒に暮らしています。おんちゃんと暮らし始めた最初の頃は、特におんちゃんを特別扱いすることも無く、平和な日々を過ごしていました。おんちゃんの知能は、だいたい5歳くらいで、少しわがままなところもありますが、暴力的では無く、優しい人で、私は大好きでした。おんちゃんは、お菓子が大好物で、また、私の

兄弟がゲームをしているところを観ることが大好きでした。無邪気な笑顔を見ると、心がほつきりしていました。

しかし、私が小学校高学年になった頃、おんちゃんが家族の一人であることが急に嫌になってきました。以前、私とおんちゃんが外で一緒に歩いているところを友達に見られたことがあります。その時、私は「障害者の隣を歩きたくない。恥ずかしい。」と思いました。今、考えてみると、きつとその時から私の心には障害者への差別意識があつたと思います。私達を目撃した友達はおんちゃんについて聞いてきたりはしませんでしたが、私はそれ以来、おんちゃんを避けるようになりました。おんちゃんが私に何か伝えようとしても無視したり、八つ当たりしたり、大好きなテレビゲームも観せなくなりました。おんちゃんは、よく本屋に行っていたので、私が本屋に行く時は、遭遇しないかハラハラしていました。

私が中学一年生になった時、おんちゃんが障害者用の施設に入ることが決まりました。それまでは、祖父と祖母が身のまわりの世話をしていたのですが、二人共もう八十歳を超えて、体力的に世話が難しくなったからです。私は内心、おんちゃんと離れることが嬉しかったです。友達には、おんちゃんのことには内緒にしていた訳ではありませんでしたが、何となく知られたく無い気持ちがあつて黙っていました。

おんちゃんがない生活にすっかり慣れた、中学二年生の春休み。おんちゃんのある施設から連絡が来ました。最近、食欲が無く、一日に一食も食べ物を食べていないということです。すぐに病院に行つて色々な検査をしました。おんちゃんは、末



期のぼうこうガンでした。家族全員、衝撃を受けました。余命は一ヶ月から二ヶ月と診断されました。入院する病院を探す間、少しの間おんちゃんは家で過ごすことになりました。私が目にしたおんちゃんは、本当につらそうでした。想像以上でした。一日中、嘔吐をして、食べても全て吐いてしまいました。どんな言葉をかければよいのか分からず、私はまたおんちゃんから逃げました。

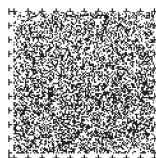
入院する病院が決まって、入院する二、三日前のこと。その日、私は友達と遅くまで遊んで、いつもより遅い時間に帰宅しました。手を洗って、私が少しくつろいでいた時、母が私に言いました。

「おんちゃんが、あなたがいつも着ている洋服を指差して、『まだ帰ってこないの?』って心配してたんだよ。ずっと待ってたの。」

その瞬間、私は涙があふれそうになりました。私はおんちゃんにひどいことをたくさんしたのに、おんちゃんは、私のことをこんなにも想ってくれていたのです。嬉しい、ごめんなさい、ありがとう。言葉にならない感情でいっぱいになりました。

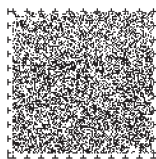
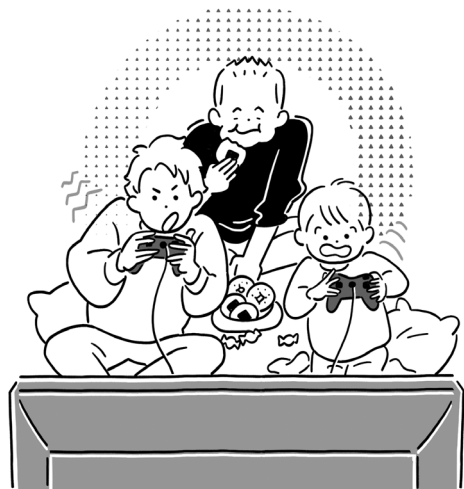
その後、おんちゃんの入院生活が始まりました。日に日に弱々しくなっていく姿を見るのは悲しかったです。私は逃げませんでした。一週間に一回はお見舞いに行き、優しい言葉をかけ、おんちゃんの手を握りました。彼が私にしてくれたように。

余命宣告を受けた二ヶ月後の、ある日の夜。おんちゃんは、息を引き取りました。亡くなった顔は、とても穏やかで、微笑んでいる様にも見えました。苦しまずに逝けたのかなという気持ち



と、おんちゃんがいなくなった悲しみが一気にあふれ出して、私は泣きました。いつも冷たい態度をとって本当にごめんなさい。私は、おんちゃんが大好きでした。

障害者だからといって、差別をすることは絶対に許されません。障害者の方達は、私達と同じひとりの人間です。私も少し前までは、差別をするひとりでした。でも、おんちゃんが私に教えてくれました。見た目や能力が違っていても、人は皆「心」を持っていて、平等なのだということ。その違いを互いに認め合い、尊重し、手と手を取り合えたのなら、きっとこの世界に差別は無くなると思います。人と違うことは当たり前で、決して悪いことでは無いのです。私は、おんちゃんのように優しい人になりたいです。



全国人権擁護委員連合会会長賞

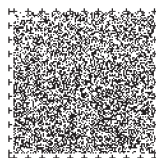
こんな姿でまたの再会を

福岡県 福岡県立門司学園中学校 二年

小田 孝太朗
おだ こうたろう

「マイクログレッシヨン」という言葉をどのくらいの人を知っているだろうか。実は私も、二週間程前にこの言葉と出会った。場所は、市内の公共プールだった。

この日、ぼくはかつてスイミングスクールの選手コースで、ともにライバルとして競い合っていた友人とともに、この市内の公共プールを訪れていた。友人とは同学年だ。父はアメリカ、母は日本出身で、現在はアメリカに居住している。いつも前向きで、絵を描くことが得意な自慢の友人だ。夏休み、来日した機会に、久しぶりにプールでタイムを競い合う約束をしていたのだ。そのプールで、私は二年ぶりに小学校のときの同級生と再会した。すると開口一番こう言われた。「すげえ。黒人の友人がおったん。」



と。すぐに友人へ振り向くと笑っていたので

「う、うん。」

と思わず答え、その場をすぐに離れた。友人は私を気づかってか、

「気にしなくてもいいよ。しかし、日本はまだまだマイクログレッション多いよな。」とつぶやいた。「マイクログレッション」どういうことなのか。友人に尋ねることもできず、家に帰って早々に調べてみた。

「マイクログレッション」とは、何気ない日常の中で行われる言動に現れる偏見や差別に基づく、見下しや侮辱、否定的な態度のことだそうだ。意図的でないことも多いが、「小さな攻撃性」とも言われ、海外では長らく問題視されているらしい。

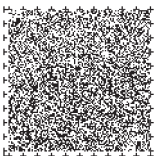
ふと振り返ると、私と友人との出会いも「マイクログレセッション」だったのではと、ある出来事が頭に浮かんできた。絵の得意な友人と互いに自画像を描いていた際、

「ねえ、肌色貸して。」

と声をかけた。友人は二つの色を手に取り、私に貸すことに戸惑っていた。すると友人の母が、私にこう尋ねた。

「うすだいい色を借りたいんだよね。でも、この子の肌の色はうすだいい色かな。」

当時小学四年生だった私だが、思わず言葉を失ったことを今でも鮮明に覚えている。



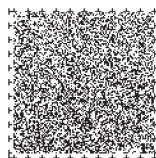
数日後、友人の母が、ある新聞記事を見せてくれた。今から三年程前、プロテニスプレイヤーの大坂なおみ選手が、黒人男性銃撃事件に抗議して、準決勝を一旦棄権した記事だった。記事を読み進めると、BLM（Black, Lives, Matter）運動のことが記されていた。人種差別に対する運動のことで、特に黒人

への不当な暴力などを排除していく運動のことだ。日本では当時多くの人が、大坂なおみ選手の棄権を疑問視した。しかし友人の家族はこの勇気ある決断を誇りに思ったという。あわせて、日本人種差別に対する意識の低さを実感し、国によって肌の色の捉え方に温度差があることに心が痛んだようだ。

その後両親も含めて、友人の母から来日して悲しい思いを味わった際の話聞くことができた。日本では、黒人を悪と思う人が未だに多く、同じプールに入ること断られたり、楽しみにしていたレストランの入店を拒まれたりしたこともあったそうだ。肌の色は違っても澄んだ心の色は同じ。肌の色に捉われることなく接してほしいと願っていた。心の色は皆同じ。このことが浸透することで交流の輪が広がり、より豊かな国際社会になるのではないだろうか。

ところで、完全に消滅しなくてもこの「マイクロアグレッション」を、せめて減らすことはできないだろうか。私なりにできることを考えてみた。

一つは、社会に浸透していて固定観念のようになっていく「だから」をなくすことだ。女だから、男だから、外国人だから、日本人だから。こうした無意識な思い込みが根深いことが偏見にもつながっていると思う。そんな属性に振り回されず、各々を尊重できる家族、学級、学校づく

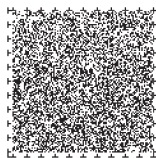
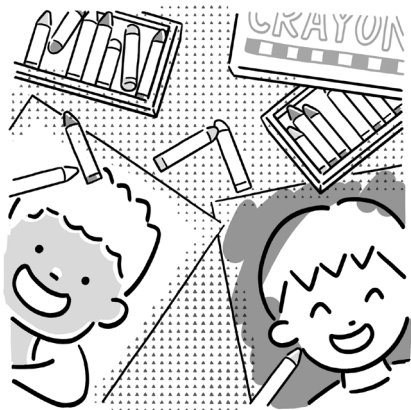


りに努めていきたい。

もう一つは、言葉のもつ力をいつも意識することだ。父から「言霊」という言葉を教わった。言葉には、目に見えない強い力が宿っている。一つの言葉で、自分自身だけでなく、周囲も幸せにすることができる。言葉は良くも悪くも人間の心理に影響を与える。心をつなぐ優しく、安心できるそんな言葉を選び、たくさん発していくようにしたい。

日々社会は進化し、益々高度情報化社会になるにともない、ネットの中での「マイクロアグレッション」も増加してくるだろう。これからも、「マイクロアグレッション」について知り、学び、考えていくとともに、多くの人に発信して理解を深めてもらいたい。

相手のことを常に意識し、共感し、受け入れる、また自分自身も大切にできる、そんな自他ともに尊重できる人に成長して、いつかまた自信をもって友人と再会したい。

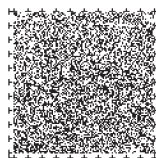


一般社団法人日本新聞協会会長賞

夢への架け橋

千葉県 学校法人東京聖徳学園光英VERTAS中学校 三年

田端 美海
たばた みみ



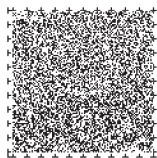
コーヒーの香りと、スイーツの甘い匂いが広がるカフェの店内で、私はある人を待っている。「はじめまして。」覚えたての手話で挨拶をした。

聴覚に障がいをもつ、山口トモさん。私が山口さんを知ったのは、数ヶ月前。「聞こえないセンプαιの課外授業」というテレビ番組で、ろう学校の教壇に立った山口さんの姿に衝撃を受けた。耳に障がいがあることをものともせず、コーヒーチェーン店で接客業をこなしている。お客さんもスタッフも聞こえる人ばかりの中で、工夫してコミュニケーションをとる術を自ら見出だして発信し、聞こえないからという理由で、夢を諦めないでほしいと、生徒たちに訴えかける。私も耳が不自由だったなら、直接人と会話することを避け、バックヤードで働く選択をするだろ

うと想像した。生徒たちの大半は、聞こえていた時になりたかった職業に就く夢を諦めたと語った。そんな思いを覆す山口さんの前向きな姿勢と、優しく包み込むような言葉に、深く心を揺さぶられた。電波越しに伝わる見えない力が、私を強く動かした。私は思いの丈を手紙に書き綴った。この手紙に感動してくださった山口さんから返信があり、職場である鎌倉のカフェでの対面が実現したのだ。

山口さんは、声を発することが出来るので、山口さんの声を聞き取ることが可能だが、私が話す声は山口さんには聞こえない。手話の出来ない私は、口を大きく動かして読み取ってもらったり、なんとなくのジェスチャーや、スマホ画面、筆談等でやりとりをする。会話中、表現しやすいう言葉を手話で教えてくださり、手話を知ってほしいという思いが優しく伝わってくる。働く姿は、健常者と何も変わらない。スタッフさんも、慣れた手話で自然とコミュニケーションをとっている。そんな光景を目の当たりにし、この職場は、障がい者と共に働く、理想のチームワークが築き上げられているのだと、確信した。山口さんは感謝を口にする。「私がここで働けているのは、自分の力だけでは成し得ないこと。共に働くスタッフの協力、理解、優しさがあってこそ」と。

山口さんの勤める会社は、障がい者の雇用や教育体制等について、先端をリードする模範的な企業のように感じる。知的、身体、精神、様々な障がいを抱えるスタッフが、全国に三百五十名以上在籍し、個人の特性を生かし、今日も店舗に立っている。障がいの有無に関係なく、人と人との間に先入観や思い込み、偏見といった心のフィ

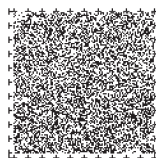


ルターをもたないというメッセージに、企業の魅力を感じる。このような企業が日本に広く浸透し、これが当たり前の形となつてほしい。

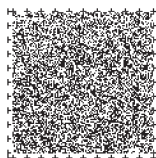
あの日、別れ際に山口さんが私をハグしてくれた時、何かを託された気がした。一緒に何かを変えたい、そんな気さえた。中学生の私には、まだ大きなことを動かす力は備わっていないが、今沸き上がる小さな気付きや思いが、いつか行動に起こせる原点になるのではないだろうか。

私が調べていく中で目に留まったのは、特に、大学等で行われている「ノートテイク」という支援だ。聴覚に障がいを抱える学生に対して、研修を受けた学生有志が、授業内容を要約筆記したり、その場で起こっていることをリアルタイムに文字にして伝える役割を担っている。聴覚障がいをもつ学生に対して、他の学生が得られる情報と同じ情報を平等に提供することが目的だ。今、全国の大学の約七十%に何らかの障がいのある学生が在籍しており、約七十五%の大学で、支援対策がなされているようだ。三年後、私の進学先にこのような制度があれば、積極的に参加したいと思う。私の耳が、私の手が、誰かの学びを助け、誰かの人生の夢を支える一人となるのなら、この上なく光栄なことだ。複雑な数学の計算が解けることや、見たこともない漢字を使えることも立派な学びだが、障がい者等への理解や実践に繋がる教育が、社会生活において、より重要ではないだろうか。身近に学べる仕組みを整えば、より多くの人が福祉に携わることができ、手を差し伸べる社会が当たり前になっていくのではないだろうか。

人は支え合つて、毎日の生活が成り立ち、自分に無いものを補いながら、生きることの大切さ



を学んでいる。夢をもち、それを叶えたいと思う気持ちは皆平等で、同じスタートラインに立つ権利がある。私は将来、音楽に携わる仕事がしたいと思っっているように、障がいをもつ人たちが、障がいを理由に諦めることのない社会を築きたい。私は、健常者と障がい者、双方の立場に寄り添える架け橋となって、共に支え合える社会の実現に貢献したい。障がい者が一人では渡れなかった向こう岸の景色を見に、これまで成し得なかった新しい世界を見に、共に歩こう！この手で、夢を掴もう！



日本放送協会会長賞

違いを認め合う心

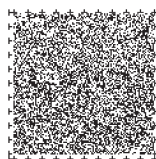
東京都 渋谷区立笹塚中学校 一年

豊山 とよやま
由紗 ゆさ

「君の気のせいじゃない?」

これは小学生の頃、いじめに遭っていることを、先生に相談した時に言われた言葉だ。予想外の言葉だったので、まづびつくりした。そして血の気が引いていく感じがした。歯をくいしばってないと涙ができそうだ。もう話せない。「分かりました。」と言って話を終わらせた。

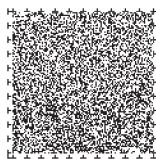
私には持病があるので、小学生の頃からあまり学校へ通えなかった。行ける日でも親と一緒に登校していた。病気の事はみんなに説明している。ただ休みがちで、人とは違う学校生活だったので、何か言われるかもと常に心配だった。悪い予感の中し、ある日突然集団で無視が始まった。あいさつしても、話しかけても徹底的に無視される。気のせいと思ったかった。けれど一緒



に來ている親も確認出来るほどになってきた。もうダメだと思い、先生に相談すると「無視する子は悪いよね。それでも君からのあいさつは続けてほしいな。相手からあいさつが返ってこないからといって、こっちもやめたらダメだよな？」となぜかダメ出しされた。努力するのは私の方なのか。私は先生に頼ることをやめた。スクールカウンセラーと面談したが「家の中で楽しみを見つけてみて。」というアドバイスだけで終わった。

しばらくは何もする気が起きず、悲しい気持ちでいっぱいだった。私が学校へ毎日通えないのはしょうがない事。誰かがそういう私を見て、イヤな気持ちになるのは止められない事。理解してほしいと言ったところで、当人にならないと本当に理解する事は出来ないだろう。どうすればいいのか。散々考えたあげく、良い答えは出ないと分かった。そして時間がもったいないと気づいた。こんな事で悩んでるのって私、バカじゃないの。命にかかわる事でもないのに。私は人の顔をうかがって生活するつもりだったのか。私はそんなに弱いのか。悲しい気持ちはなぜか怒りに変わり、我に返った気がした。

「価値観や正解は人によって違うから、自分だけが正しいと思っではいけない。努力をしても話の通じない人がいたら、戦わず距離をおきなさい。」と言われたことがある。もしかしたらいじめる側にも理由があり、それがその人の正解なのかもしれない。でも私たちは人間で、頭でしっかり考え、口に出して相手に気持ちを伝えられる。そして相手の立場を想像する事だって出来る。それをせずに相手を攻撃するのは、もはや話を通じない人間とは思えない。側にいると、傷が深くなるばかりだろう。だから距離を置き、

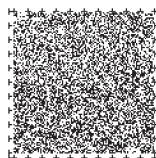


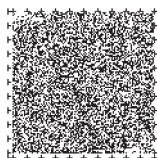
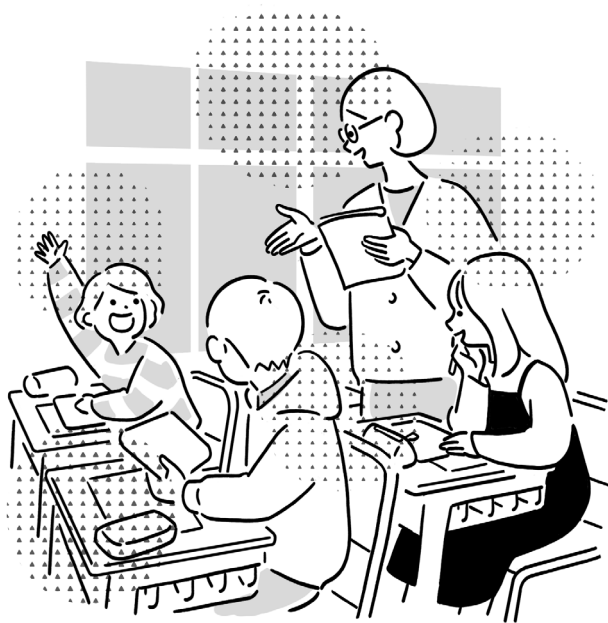
逃げるしかない。そしてその先には、受け入れてくれる場所が必要だ。それは家族の元であればいいし、理解が得られなければ、分かりやすくアクセス出来る、フリースクールのような場所が必要だと思う。

中学一年生の私は、非力で自分の身の周りの事で精一杯だ。でもやりたい事や将来の夢がある。叶えるために、今やらなければいけない事も分かっている。人に振りまわされているヒマはない。自分で自分を大切にすべきだ。

「人が人らしく生きる権利」自分の人権を守るためには、自分も他人の人権を守らなければならない。まず人を傷つけない事。自分と違う境遇、自分と違う考え方や意見を認める心を持つ。納得が出来なくても、理解する努力をしてみる。「そういう物の見方があるんだ。」「私ではその意見は思い付かなかった。」と相手との違いを、ポジティブに楽しむ事がとても大切だと思う。そうすれば相手も心を開き、受け入れてくれるだろう。

「多様性を尊重する」とニュースでよく耳にする。これから日本は人口が減って、外国人が増えていくのかもしれない。そうなるとなおさら柔らかい心で、人種を越えて他人を理解し、尊重する心を持たないと、世の中がうまくまわらないだろう。排除するのではなく、受け入れる。今は未来につながっている。私たちはその準備の真っ只中にいる。多様性を受け入れ成長していく。そしてみんなが平等で、生きやすい世の中を、アイデアを出し合い作っていかねければいけないと思う。



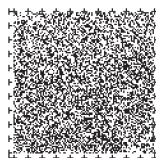


法務事務次官賞

子供の人権を守るために

富山県 富山市立興南中学校 三年

福村 彩華
ふくむら あやか

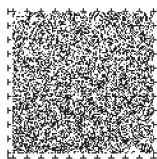


私が生まれて間もない頃、母と父は離婚した。それからの幼い私は、父と離れ、母の元で暮らした時期、兄妹と離れて暮らした時期、母に見捨てられ、一人で施設に入り暮らした時期などがあり、様々な場所で様々な人と過ごしてきた。そして、今は、父が再婚し、父と、血の繋がっていない母・兄妹・祖母と一緒に生活をしている。幼い頃の出来事だが、今でもその時に感じた辛く寂しい思いは、嫌になるほど覚えていて。忘れたくても忘れられない。心のタトウミみたいなものだった。

私は、この過去の出来事から、家庭環境による子供の人権について考えたことがある。それは、子供の人権を守る存在は大人であるということだ。過去の私には、決める権利がなかった。住む

場所も一緒に住む人も私が望むものではなかった。生まれて間もない頃で喋られないから仕方ないのかもしれない。でも、それが私が成長した時に私を苦しませる材料となるのなら、誰が責任を取ってくれるのだろうか。決して、私は、過去を勝手に決めたことに文句を言っているわけではない。少しは、私のことを考えてくれたと思うし、何より、過去を刻んだ以上、それを言い訳にせず、今を正解にしていけることが、私にできることであるから。でも、このような人は、私以外にもたくさんいると思う。子供の権利や人権を大人が奪って良いのだろうか。子供の純粋な心を大人の事情によって苦しませて良いのだろうか。大人の事情で嫌な思いをしたり、子供の未来が奪われたりすることは、立派な人権侵害だと思う。だからこそ、保護者が最後まで自分の手で子供を育てる責任を持つことが必要であると思う。

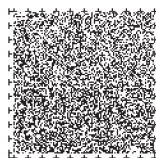
また、私は、過去の経験から、家族についての理解が変わっていた。私は、施設での生活の時、血の繋がっていない、年齢も性別も異なった、共通点が少ない人と過ごしていた。しかし、その場所での生活は、とても温かいものであったと思う。ころころと変わる環境に身を置き、母に見捨てられ、内気な性格だった私に、施設の先生やみんなは、にこやかな笑顔で話しかけてくれた。私はその時、孤独だった心に優しさが溶け込んでいくような気がして、本当に嬉しかった。家族は、血が繋がっている。だから、なんでも分かりあえる。なんてことはない。施設の人や現在の母のように、血が繋がっていないなくても、安心できる人がいる。逆に、血が繋がっていても、安心して暮らせないような人もたくさんいる。「家族」それは、安心して一緒に暮らすことのできる人。これからも、私は、自分が安心して一緒に



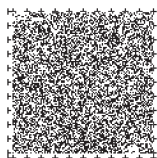
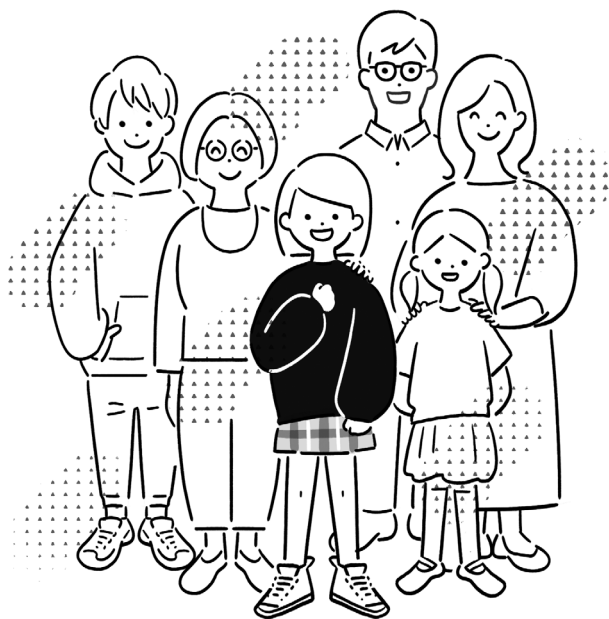
暮らすことができると思う家族を大切に、生きていきたい。

家庭環境や親の選択によって子供の夢や希望が制限される現代。そんな現代の家庭による子供の人権侵害は、外から見ると、最も気づきにくいものであり、自分から言い出しにくいものであり、簡単に改善できないものである。だからこそ、年々

家庭内での人権侵害の事例が多くなっている、本当は生きる権利のある子供が命を落としていくのだと思う。では、私達ができることは、何なのだろうか。それは、「弱さを見せる強さを持つこと」である。弱さを見せる強さを持つことは、相手に相談することである。生きていけば誰だって、一つや二つ、心に傷を負っている。でも、いつだって私達は、自分の心の中しか分からない。それを他人に見せるか見せないかはその人の自由だけれど、もし、それが原因で自分を壊してしまうのなら私はすぐに誰かに打ち明けてほしいと思う。私も、今までこの過去の出来事を誰にも話せなかった。でも、少しでも私と同じ思いをしている人の力になりたくて、大人の皆さんに訴えたくて、勇気を出した。自分の弱みを見せるのは、怖いかもしれない。でも、自分の弱みを見せると、人は必ず強くなれる。私は、そんな人を心の底から応援し、全力で支えたい。家庭環境による人権侵害は、私達にはこんな対処法しかできない。でも、大人という存在が変われば、この問題自体がなくなっていくのではないだろうか。子供には、大人の皆さんの気持ちなんて分かりたくても分からない。でも、どんなに小さな子供でも大人と同じ量の人権をみんな必ず持っている。だから、私は、子供だけど、大人に意見を言う。子供だからこそ、大人に意見を言う。今は小さな叫びだけれど、いつか大きな叫びになることを願って。現実から目を背ける



大人を奮い立たせ、多くの子供の人権を守るために、私は、努力をし続ける。弱さを見せた強い心で。



法務事務次官賞

私にも夢がある

福岡県 久留米市立青陵中学校 一年

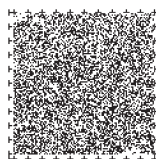
岩根^{いわね}
伊佐^{いさ}

「おい、外人。お前外人やろ。」

五才の時、保育園で初めて同じクラスの子に言われたとき、私はびっくりして体が固まってしまいました。周りの子も一緒になって「外人、外人」とからかいました。私は初めて「外人」という言葉を聞いたのでわけが分かりませんでした。が、なんとなく悪いことなのだろうと思いました。家に帰ってから母に

「外人って何？おれ外人やと？」

と尋ねると、父親が外国出身だと教えてくれました。その説明を聞いても五才の私にはピンときませんでした。私の父は他の子のお父さんとどう違うのか分からなかったのです。父は私にとっ

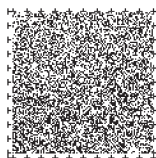


て、いつも優しくて明るい父でした。しかしからかわれているうちに、私だけが他の子と違って、それはとても恥ずかしいことだと感じてきました。赤ちゃんの頃から一緒に遊んでいた仲間からはずれて、急に一人ぼっちになった気持ちになりました。小学生や中学生になっても「外人」と言いながらボールを投げつけられたり、「黒人」「背の高いやつはキモい。」などと言われたりが続きました。知らない人から言われた時もショックでしたが、今まで仲良く遊んでいた友達に言われた時はもっと悲しくなつて、私は何も言うことができませんでした。周りの人たちも一緒になつてからかってくるのです。私の見た目は周りの人達とは少し違って見えるのだと分かりました。私は毎日顔も体も隠して生活したいと思いましたが、それは難しいことでした。親が外国出身であることも、見た目が周りの人と違うことも私にはどうしようもありません。どうしようもないので家に帰ってから両親に、

「なんでお父さんは外国人やと？日本人のお父さんがよかった。」

と言いました。両親が悲しそうな顔をしたので、私はもっと悲しくなりました。私も父に傷つくことを言ってしまったのです。

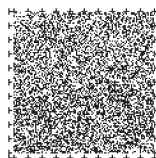
ある時、私は学校の図書室でキング牧師の伝記を読みました。キング牧師は「I have a dream（私には夢がある）」という言葉から始まる有名な演説を行った人物で、アメリカで黒人差別と闘いました。私は彼の伝記を読んだ時に、残酷な差別が存在することを学び苦しい気持ちになりましたが、差別と闘うキング牧師への尊敬の念が生まれましました。また、世の中には人種差別の他にも、男女差別や障害者差別、身分差別など



いろいろな差別があることも勉強しました。生まれつきのことや、本人にはどうしようもないことをバカにされたり、生活を制限されたりして、悲しい思いや不自由な生活をする人がたくさんいるのです。「差別」と聞いたら何か特別なことだと考えられがちですが、実は特別なことではありません。日常のささいな所で日々、起こっています。おそらく、私に傷つくことを言った人たちは軽い気持ちで差別的な発言をしたのだと思います。

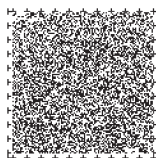
でもその発言は私の心を深く傷つけ、思い出す度に私の胸を苦しめています。もしその人たちも海外に行って、逆に肌の色や見た目をバカにされたらどんな気持ちになるでしょうか。私も深く考えず、いつも私を大事にしてくれた父に差別的な発言をして、父を深く悲しませてしまいました。こうした発言は相手がどう思うかを考えて口に出さないように気をつけるべきだと思います。

私の父も日本に来てから生活する中で、たくさん差別的な発言を受けたことがあるそうです。ある時私は父にそれでもなぜ日本で生活しているのかと尋ねました。私だったらつらくてここにいたくないと思うでしょう。すると父は、傷つくようなことを言う人もいたけれど、それよりもっとたくさん優しい友達や励ましてくれる人たちが周りにいるので、日本が大好きだし毎日が楽しいからと教えてくれました。私はそれを聞いて、確かに私の周りにも、私の見た目のことを全く気にせず、仲良くしてくれる友達や支えてくれる大人たちもたくさんいることに気づきました。その人たちのことを考えるととても楽しい気持ちになり、自分の見た目が他の人と違っていても親がどこの国から来ても、恥ずかしがったり悪いことをしているような気持ちに



なったりしなくてもよいと感じました。そのような人たちをお手本にして、私も他の人の見た目や人種などで差別しないように気をつけたいと思います。

キング牧師は「私には夢がある」と語り、差別のない社会で黒人と白人が共に仲良く生活することを夢見ていました。私にも夢があります。生まれつきの個性をお互いに尊重して、みんな自分に自信を持つて胸を張って生活する社会を実現することです。それはみんなが幸せに生活できる平和な社会にもなります。一人一人が相手への思いやりを忘れなければ、それは可能です。みんなで同じ夢を実現させませんか。

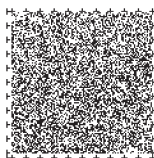


法務事務次官賞

僕らは今を生きる

愛媛県 今治市立北郷中学校 三年

佐野^{さの} 洸太郎^{こうたろう}



去年の秋、僕の祖父は、アルツハイマー型認知症だとわかった。

八十歳の祖父は、高齢者の運転免許認定講習に行き、実技試験は合格したが、認知能力検査で不合格になった。僕たち家族は、年を取ったから物忘れがひどくなったのだと思っていた。僕は、祖父自身もそう思っているだろうと思っていた。軽い気持ちで病院に行ったが、そこでアルツハイマー型認知症だと診断された。僕たちは、驚き困惑した。口には出さなかったが、祖父自身が一番ショックを受けていたと思う。

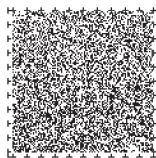
それから生活は一変した。祖父は、病気の進行を遅らせる薬を飲むために、運転免許証を返納した。今までのように外出が自由にできなくなってしまった。僕の塾の送り迎えもできなくなり、

僕は自転車で塾に行くようになった。

祖父は陶芸が趣味で、たくさん作品を作り、たくさんの賞を取った。陶芸教室では、先生として生徒に指導をしていた。しかし、教室に車で通えなくなり、陶芸教室を辞めてしまった。「家にある陶芸場でも創作活動ができるよ。」と、僕は明るく勧めてみたが、祖父は、陶芸場にも行かなくなった。毎日、寝て、起きて、食べて、テレビの前に座って、また寝て、同じことを繰り返した。「外食に行こう。」と誘っても、行こうとしなかった。祖父の中で、何かが消えてしまった。

両親が働いていたので、僕は、小さい頃からすぐ裏にある祖父母の家で過ごすことが多かった。祖父は、優しくおおらかで、僕の願いを何でも笑顔で聞いてくれた。しかし、今の祖父は、何度も同じ話を繰り返す。昔話ばかりをする。僕は思わず「さっきもその話聞いた。」と迷惑そうに言ってしまった。祖父が認知症であると分かっているのに、祖父と話するのが負担で冷たく接してしまう。それを見た母が「おじいちゃん、今を生きる人になったんだよ。」と言って笑った。祖父は、数分前の過去を忘れて、今だけを生きている。そう思うと少し笑えて、それはそれでうらやましいとさえ思えた。祖母と口論になっても、その数分後には忘れている。覚えていると腹が立つが、覚えていないから仕方がないと、祖母は苦笑いしながら、祖父にいつも寄り添っている。

ある時、祖父は僕たち家族に言った。「自分は、アルツハイマー型認知症だから、いつか皆のことを忘れてしまうかもしれない。もしも、それで皆を困らせる時が来

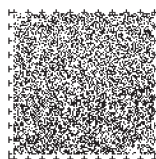


たら、自分にかまわず、病院に放り込んでくれ。」と。その言葉を聞いて、僕は胸が締め付けられた。家族と別れなければならぬ時が来ることを覚悟している。その気持ちを考えると、とても切なく、悲しかった。僕たちは祖父の考えを知り、今後のことを家族で話し合い、協力して祖父を支えていこうと決めた。

中学校の総合的な学習の時間に福祉体験学習が行われた。僕は『老人ホームでの過ごし方』という講座を選んだ。少しでも、祖父のことを知りたいと思ったからだ。そこで認知症の人の気持ちや接し方について学習した。認知症になった人は、自分が認知症かもしれないと自覚していて、自分が以前と違っていているのが分かったと不安になり、精神的にも不安定になる。それが、いら立ちや怒りとなって表れる。祖父が以前より怒りっぽくなったのは、これが原因だった。認知症の人は、昔のことをよく覚えていたが、最近のことを忘れてしまい、理解ができないので戸惑いや疎外感を感じる。優しく「違うよ。」と声を掛けられても、「自分は間違っていない。」とプライドが傷つく。そのような時は、違う話題に変えて気を逸らすと良いなど、いろいろな場面に応じた高齢者への接し方を学ぶことができた。

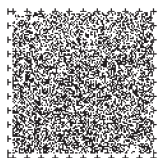
福祉体験学習での学習を生かし、家族で祖父への関わり方を工夫するようにした。ほんの少し変えただけで、祖父も他の家族も笑顔で過ごす時間が増えた。あまり外出をしなくなった祖父が、六月にあった市総合体育大会の水泳競技の会場に、祖母と一緒に僕の応援に来てくれた。その夜、僕の県大会出場を祝って、家族全員で夕食を楽しむこともできた。

今、日本では高齢化が進み、様々な問題が起こっている。祖父との生活を通して、安心してみ

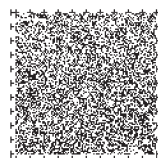


んなが暮らせる社会を作るためには、正しい知識を身に付けて相手を理解することが必要だと思った。そして、一人で抱え込むのではなく、家族や社会で協力し合うことの重要性を痛感した。

これから、祖父の認知症は進行していくだろう。それは、悲しく辛いことではあるけれど、受け入れなければならない。今後のことを想像し準備しながら、今を精一杯生きる祖父の話を笑顔で聞き、祖父との時間を大切に過ごしていきたい。

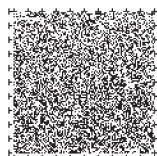


名 称		所 在 地	電 話
広島法務局	〒 730-8536	広島市中区上八丁堀 6-30 広島合同庁舎 3 号館	082-228-5790
山口地方法務局	〒 753-8577	山口市中河原町 6-16 山口地方合同庁舎 2 号館	083-922-2295
岡山地方法務局	〒 700-8616	岡山市北区南方 1-3-58	086-224-5656
鳥取地方法務局	〒 680-0011	鳥取市東町 2-302 鳥取第 2 地方合同庁舎	0857-22-2289
松江地方法務局	〒 690-0001	松江市東朝日町192-3	0852-32-4200
高松法務局	〒 760-0019	高松市サンポート3番33号 高松サンポート合同庁舎南館	087-821-7850
徳島地方法務局	〒 770-8512	徳島市徳島町城内 6-6 徳島地方合同庁舎	088-622-4171
高知地方法務局	〒 780-8509	高知市栄田町 2-2-10 高知よさこい咲都合同庁舎	088-822-3331
松山地方法務局	〒 790-8505	松山市宮田町 188-6 松山地方合同庁舎	089-932-0888
福岡法務局	〒 810-8513	福岡市中央区舞鶴3-5-25 福岡第 1 法務総合庁舎	092-739-4151
佐賀地方法務局	〒 840-0041	佐賀市城内 2-10-20 佐賀合同庁舎	0952-26-2148
長崎地方法務局	〒 850-8507	長崎市万才町 8-16 長崎法務合同庁舎	095-826-8127
大分地方法務局	〒 870-8513	大分市荷揚町 7-5 大分法務総合庁舎	097-532-3161
熊本地方法務局	〒 862-0971	熊本市中央区大江 3-1-53 熊本第 2 合同庁舎	096-364-2145
鹿児島地方法務局	〒 892-8511	鹿児島市山下町13-10 鹿児島第 3 地方合同庁舎	099-219-2100
宮崎地方法務局	〒 880-8513	宮崎市別府町 1-1 宮崎法務総合庁舎	0985-22-5124
那覇地方法務局	〒 900-8544	那覇市樋川 1-15-15 那覇第 1 地方合同庁舎	098-854-1215



問合せ先一覧（法務局・地方法務局）

名 称	所 在 地	電 話
札幌法務局	〒 060-0808 札幌市北区北 8 条西 2-1-1 札幌第 1 合同庁舎	011-709-2311
函館地方法務局	〒 040-8533 函館市新川町 25-18 函館地方合同庁舎	0138-23-9528
旭川地方法務局	〒 078-8502 旭川市宮前 1 条 3-3-15 旭川合同庁舎	0166-38-1111
釧路地方法務局	〒 085-8522 釧路市幸町 10-3 釧路地方合同庁舎	0154-31-5014
仙台法務局	〒 980-8601 仙台市青葉区春日町 7-25 仙台第 3 法務総合庁舎	022-225-5739
福島地方法務局	〒 960-0103 福島市本内字南長割 1-3	024-534-1994
山形地方法務局	〒 990-0041 山形市緑町 1-5-48 山形地方合同庁舎	023-625-1321
盛岡地方法務局	〒 020-0045 盛岡市盛岡駅西通 1-9-15 盛岡第 2 合同庁舎	019-624-9859
秋田地方法務局	〒 010-0951 秋田市山王 7-1-3 秋田合同庁舎	018-862-1443
青森地方法務局	〒 030-8511 青森市長島 1-3-5 青森第 2 合同庁舎	017-776-9024
東京法務局	〒 160-0004 新宿区四谷 1-6-1 四谷タワー13F	0570-011-000
横浜地方法務局	〒 231-8411 横浜市中区北仲通 5-57 横浜第 2 合同庁舎	045-641-7926
さいたま地方法務局	〒 338-8513 さいたま市中央区下落合 5-12-1 さいたま第 2 法務総合庁舎	048-859-3507
千葉地方法務局	〒 260-8518 千葉市中央区中央港 1-11-3 千葉地方合同庁舎	043-302-1319
水戸地方法務局	〒 310-0061 水戸市北見町 1-1 水戸法務総合庁舎	029-227-9919
宇都宮地方法務局	〒 320-8515 宇都宮市小幡 2-1-11 宇都宮法務総合庁舎	028-623-0925
前橋地方法務局	〒 371-8535 前橋市大手町 2-3-1 前橋地方合同庁舎	027-221-4466
静岡地方法務局	〒 420-8650 静岡市葵区追手町 9-50 静岡地方合同庁舎	054-254-3555
甲府地方法務局	〒 400-8520 甲府市丸の内 1-1-18 甲府合同庁舎	055-252-7239
長野地方法務局	〒 380-0846 長野市大字長野旭町 1108 長野第 2 合同庁舎	026-235-6611
新潟地方法務局	〒 951-8504 新潟市中央区西大畑町 5191 新潟地方法務総合庁舎	025-222-1563
名古屋法務局	〒 460-8513 名古屋市中区三の丸 2-2-1 名古屋合同庁舎第 1 号館	052-952-8111
津地方法務局	〒 514-8503 津市丸之内 26-8 津合同庁舎	059-228-4193
岐阜地方法務局	〒 500-8729 岐阜市金竜町 5-13 岐阜合同庁舎	058-245-3181
福井地方法務局	〒 910-8504 福井市春山 1-1-54 福井春山合同庁舎	0776-22-5090
金沢地方法務局	〒 921-8505 金沢市新神田 4-3-10 金沢新神田合同庁舎	076-292-7804
富山地方法務局	〒 930-0856 富山市牛島新町 11-7 富山合同庁舎	076-441-0550
大阪法務局	〒 540-8544 大阪市中央区大手町 3-1-41 大手前合同庁舎	06-6942-9496
京都地方法務局	〒 602-8577 京都市上京区荒神口通河原町東入生上生洲町 197	075-231-0131
神戸地方法務局	〒 650-0042 神戸市中央区波止場町 1-1 神戸第 2 地方合同庁舎	078-392-1821
奈良地方法務局	〒 630-8301 奈良市高畑町 552 番地 奈良第 2 地方合同庁舎	0742-23-5457
大津地方法務局	〒 520-8516 大津市京町 3-1-1 大津びわ湖合同庁舎	077-522-4673
和歌山地方法務局	〒 640-8552 和歌山市二番丁 3 和歌山地方合同庁舎	073-422-5131



入賞作品を基にした映像作品

これまでの全国中学生人権作文コンテストの入賞作品を題材とした映像作品です。
YouTube法務省チャンネル (<https://www.youtube.com/user/MOJchannel>)
からご覧いただけます。

また、前掲している全国の法務局・地方法務局又は下記の公益財団法人人権教育啓発推進センターの人権ライブラリーでの貸出しを行っておりますので、お問い合わせください。



わたしたちが伝えたい、大切なこと

～アニメで見る全国中学生人権作文コンテスト入賞作品～

入賞作品の中から3作品をアニメーション化して、日常生活の中で「人権」について理解を深めていった気付きのプロセスを描いた映像作品です。アニメーションのほか、本コンテスト中央大会審査員長で作家の落合恵子先生からのメッセージも収録されています。



<https://www.youtube.com/watch?v=xT4uMB6KqFE>



未来を拓く5つの扉

～全国中学生人権作文コンテスト入賞作品朗読集～

入賞作品の中から5作品を、俳優の濱田龍臣さんとAKB48の大和田南那さんによる朗読に、アニメーションやイラストを組み合わせ映像化したものです。朗読のほか、本コンテスト中央大会審査員長で作家の落合恵子先生からのメッセージも収録されています。



<https://www.youtube.com/watch?v=WWY05CGaeQA>



わたしたちの声 3人の物語

～「全国中学生人権作文コンテスト」入賞作品をもとに～

入賞作品の中から3作品を原案として、作者の中学生が人権について考えを深めていく過程をドラマ化した映像作品です。

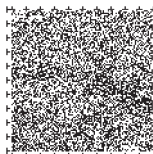


<https://www.youtube.com/watch?v=BQW5zjbknNA>

人権ライブラリー

TEL.03-5777-1919

URL.<https://www.jinken-library.jp/>



第42回全国中学生人権作文コンテスト中央大会審査員

作 家（審査員長）

一般社団法人日本新聞協会事務局長

日本放送協会解説委員室解説主幹

文部科学省初等中等教育局視学官

全国人権擁護委員連合会会長

法務省人権擁護局長

落 合 恵 子

林 恭 一

清 永 聡

菅 野 和 彦

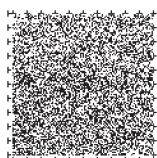
内 田 博 文

鎌 田 隆 志

（敬称略）

転載について

本作文集の作品を、印刷物やインターネット上に掲載したい場合には、
法務省ホームページ (<https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken111.html>)
をご覧ください。



発 行 令和6年3月11日
発行者 法務省人権擁護局
全国人権擁護委員連合会
東京都千代田区霞が関一丁目1番1号
電話 03(3580)4111 内線5875
URL <https://www.moj.go.jp/JINKEN/>



人権イメージキャラクター
人 KEN まもる君

法務局では、人権侵害による被害を受けた方を
救済するための活動を行っています。
人権について困ったことがあれば・・・
ひとりで悩まずにご相談ください。



人 KEN あゆみちゃん

こどもの人権110番 (全国共通)



0120-007-110

ゼロゼロなのひやくとおぼん

みんなの人権110番 (全国共通)



0570-003-110

ゼロゼロみんなのひやくとおぼん

女性の人権ホットライン (全国共通)



0570-070-810

ゼロナナゼロのハートライン

外国語人権相談ダイヤル (全国共通)



0570-090-911

LINEじんけん相談



こちらから友だち追加をして相談することができます。
@snsjinkensoudan



インターネット人権相談受付窓口



インターネット人権相談

検索



パソコン、携帯電話
スマートフォン共通

<https://www.jinken.go.jp/kodomo>

第40回全国中学生人権の作文コンテスト 特設サイト



https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken40_2021.html

法務省人権擁護局
公式 X



@MOJ_JINKEN



法務省人権擁護局
公式フェイスブック



HumanRightsBureau.MOJ



法務省人権擁護局
公式 LINE



@JINKEN01



法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会

